

## 第17回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム報告

実行委員長 岸本俊二 (KEK・物構研)

2004年1月8日から10日にかけて第17回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウムが物質・材料研究機構千現地区(8日), つくば国際会議場(エポカルつくば, 9・10日)を会場に開催された。今回の特徴は受付で登録された数だけでも623名と, 550名規模であった前回, 前々回と比べてさらに70名ほど上回る参加者数だったこと, 特別講演, 企画講演を含めた口頭発表が92件, ポスター発表392件(前回287件)が予定され, 合計で500件近い発表が行われたことである。会場の都合でポストデッドラインポスターの受け付けを途中で打ち切ったほどであった。今回の学会・シンポジウムはこれまでにない大きな規模で開催されたといえる。

特別講演では十倉好紀先生に「強相関電子系と放射光」, I. Lindau 先生に「Scientific opportunities and technological challenges with fourth generation light sources」というテーマで話していただいた(写真1, 2)。放射光がサイエンスの将来を切り開くのにきわめて有効であること, またそのための開発努力の必要性をあらためて強く認識させられる印象的な講演だったのではないだろうか。「コヒーレント X 線で見えてくる世界」, 「生体物質の VUV・SX 自然円二色性」, 「放射光時分割測定 of 最近の展開—光誘起現象の解明へ」, 「医用画像診断への応用」, 「放射光を用いた微細加工の最前線」の5つの企画講演(写真3)も興味深いテーマで行われ, 会場は参加者であふれる状況だった。これについては参加者数が開催準備当初の予測を大きく上回り用意した講演会場が狭かったという事情が加わっており, 実行委員会として反省すべき点である。また残念ながら講演者体調不良のため企画講演1件が取り消しと

なった。会場の参加者には事前に連絡ができずご迷惑をかけ実行委員会としてお詫びいたします。口頭発表準備について実行委員会が今回とくに力をいれたのは近年一般的となった PC, プロジェクターによる発表を支障なく進めることだった。これについては動画ファイルが実行できないというトラブルが2件あったものの全体としてはうまくいったと考えている。事前の電子ファイル提出に協力していただいた発表者のみなさんのおかげである。9日午後, 10日午前に設けられ1回200件におよぶポスター発表(写真4)では活発な討論が行われたが, 1時間半のセッションでは短すぎるという意見をいただいている。

9日夜に行われた懇親会はバスによる移動で会場を移し238名の参加者が集まって, 「鏡開き」(「これまでではじ

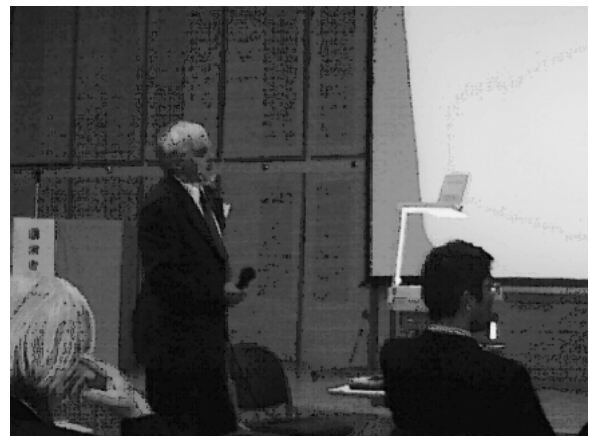


写真2 特別講演: Lindau 氏

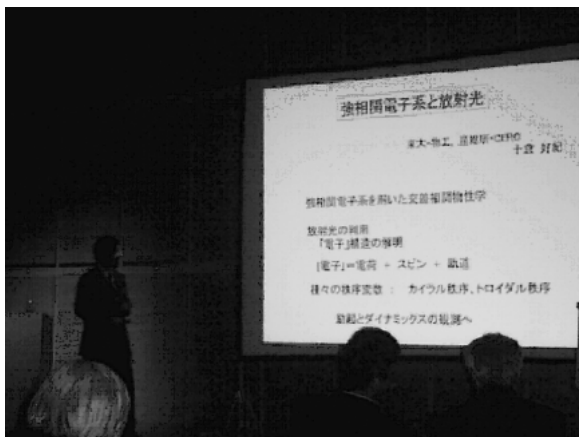


写真1 特別講演: 十倉氏



写真3 企画講演会場



写真4 ポスター会場

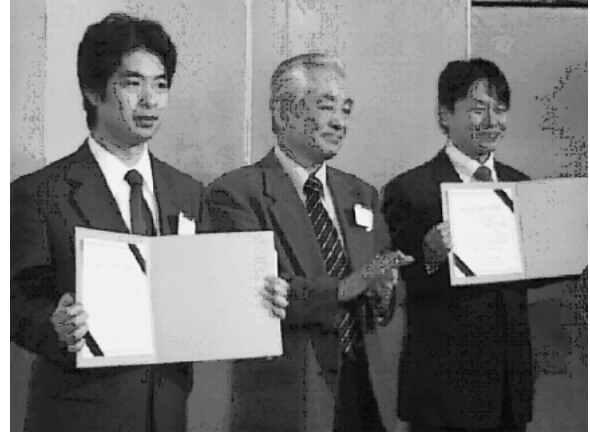


写真6 懇親会：学会奨励賞受賞者と松下会長



写真5 懇親会：鏡開き



写真7 特別展示会場

めでの企画」と失言してしまったが取消します)で開始された(写真5)。とても盛況で会場のあちこちで話の花が咲き奨励賞受賞式(写真6)での受賞者のユニークでユーモアの利いた話も聞き取りにくいほどだった。懇親会の最後に高田組織委員長より次回の学会は佐賀で行われることが発表され、佐賀県立九州シンクロtron光研究センターの富増先生より協力を要請する挨拶が行われた。新しい放射光施設立ち上げの現場で次回も成功させられるよう学会としての取り組みが求められている。9、10日の会場で行われた特別展示会へは民間企業42社に出展していただいて活発な情報交換ができたと考えている(写真7)。

今回の実行委員会の仕事を終えて、私は放射光利用研究の将来性を実感できる学会として成功させられたのではな

いかと考えている。学生会員を対象としたポスター賞・口頭発表賞が例年どおり行われたが若手研究者の研究奨励の工夫が今後も必要と感じている。懇親会にも若手が参加しやすい雰囲気づくりが大切である。規模が大きくなった放射光学会を成功させるには日程・プログラム編成の再検討も必要かもしれない。

最後に、今回の学会開催にあたり助成金をいただいた茨城県科学技術振興財団、高エネルギー加速器科学研究奨励会に深く感謝いたします。またボランティア派遣など運営に協力していただいた土浦・つくばコンベンションビューロー、アルバイトとして奮闘していただいた方、その他関係者のみなさんに実行委員会を代表して感謝いたします。